



境界あれこれ

8

～ 「友達」と「しんゆう」 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

はじめに

子どもも大人も、友達作りや「しんゆう」作りには誰もみな悩んだり苦しんだりしている。辛い思いをした挙句に、引きこもって人との関係を断つ人が数十万人もいる時代である。

小中学生のスクールカウンセリングをしていると、子どもたちが、時々「私たちって『しんゆう』だよねえ」と言っているのを聞く。一方で、「『しんゆう』って何？友達と同じ？」と聞いてくる子がいる。そんなことから、今回は『友達』と『しんゆう』について考えてみようと思う。

「しんゆう」って？

「しんゆう」を大辞泉で引いてみたところ、次のようなことが載っていた。

「心友」・・・心から通じ合っている友達

「真友」・・・本当の友人。真の友。

「親友」・・・互いに信頼し合っている友達。

極めて仲の良い友達。

一方「ともだち」を引いてみると・・・。

「友達」・・・一緒に勉強したり仕事をしたり遊んだりして、親しく交わる人。

友人。友。朋友。

そして「とも」は・・・

「友・朋」・・・①親しく交わる人。ともだち。
友人。朋友。②志を同じくする人。
同志。③常に好んで親しんでいる
もの。④道づれ。なかま。

調べてみると、このように同じ「しんゆう」でも漢字が異なるものがあることがわかる。一般には「しんゆう」というと「親友」と書くことが多い。

この「親」は①したいこと。したしみ。よしみ。疎の対語。②親・兄弟などの近親者。親族。みうち。とある。

「心」は①ところ。精神。②ところのそこ。本心。③物の中央。④仏教では、対象を捉え、思 する働きを持つもの。主観。精神。「心王」に同じ。⑤心の臓。心臓。など色々な意味があるが、「心友」の「心」は①のところであろう。

そして「真」は①まこと。本当。ほんもの。真実。真正。②真理。③まじめなこと。真剣なこと。また、そのまま。などがある。「真友」の「真」は、やはり①のまこと、本当、ほんものであろう。

前述のように、「しんゆう」と言うと「親友」と書くが、「真友」や「心友」の方が「親友」より特別な感じがするのは、その漢字のもつイメージや意味にもよるだろう。「親」の漢字だと、「親しい」という意味合いが強く、一般的な「友達」より少し仲が良いという程度でも「しんゆう」となってしまうような感じで、「しんゆう」のイメージとしては「親」よりも「心」や「真」の字を当てた方が良いようにも感じる。

友達って？

そもそも「友達」と「単なる同級生」や「仲間」という言葉の違いはどうか？

同級生は友達なのか？同級生と言えども、仲の良し悪しはある。一緒に遊んでいる子も、その日によって異なることもある。

どこまでを友達と呼ぶのか？クラス仲間という言葉もある。同じ学級の子は、クラス仲間ということにはなるが、子どもによっては「仲間」とは思っていないこともあるだろう。

人が持つ人との距離感は様々である。単なる同級生を仲間と感ずるかどうかは人によるので、必ずしも同級生は仲間とは言えないかもしれない。

先生方はたびたび「お友達とは仲良くしましょう」とおっしゃるが、この「お友達」の意味するところはクラス仲間であろう。しかし、子どもたちにはその感覚はある程度仲の良い子となるのではないか？

「友達百人できるかな？」という歌があるが、百人も友達を作るということは、その友達の意味によっては不可能である。同じクラスの子を全員友達と呼ぶとしても、学校の規模がよほど大きくないと百人は作れない。「百人できないとだめなんだ。」と悩んでしまう子もいる中、「友達」と言える関係性とは一体何だろう？

単なる顔見知りや、名前は知っているけどという関係性は友達とは言わないだろう。少なくとも、一緒に遊んだり、学んだり、言葉でのやり取りもちょうくちよくある関係と思われる。自閉性の障害を持った子どもでは、クラスの子全員の名前と顔を覚えるのは至難の業で、一年たっても殆ど覚えていない。従って「友達はあるの？」と聞けば、一人か二人いえれば十分となる。この時の「友達」は日々やり取りできている友達である。

親友？心友？真友？

では「友達」が「しんゆう」になる境界はどうなるか？

日々やり取りをしたり、遊んだりする仲

間であり友達である人たちの中でも、お互いに信じあえる関係であり、頼ったり頼られたり、意見の食い違いがあっても言い合いをしても関係性を保てる人間関係ができたときに「友達」が「しんゆう」になるのではないか？

いつもベッタリ一緒にいても、どちらか一方が他方に気を使っていて、強いほうの言いなりになったり、機嫌取りをしている関係性は「しんゆう」ではない。お互いに対等で、言いたいことがあれば言える関係性でありながらも、言って良い事と悪い事を互いに理解でき、相手の気持ちや立場を互いに理解しあい、共感でき、共にいて苦しかったり辛かったりするということがない、いわゆる自然体でいられる関係性が「しんゆう」であろう。

こうして考えてみると、「しんゆう」と「友達」の間には、大きな隔たりがあるとされる。単なる「友達」を作るのは、それほど難しくはないのだが、「しんゆう」となるとそれは一気にハードルが高くなる。

「私たちって親友よね～」などと一々言う必要もないし、常にベッタリいる必要もない。互いに互いを尊重でき、別々の場所にいても、一緒にいても、心の距離感は変わらない。従って、離れていても、裏切られたり、傷つけられたりする不安を感じない、そんな関係性である。

血の繋がった兄弟間でも、仲の良い兄弟と悪い兄弟がいて、長年一緒に暮らしてきたのに、信じ合えないこともある中で、生まれも育ちも違う者同士が、信頼できる関係を築くのはとても難しい。そんな関係を築ける相手を見つけられるとしたら、それはとても幸運で、互いの努力のたまものと言えるのではないか。そう考えれば、「しんゆう」はそう簡単にできないし、一生に一人できれば良い方となるだろう。

我が身を振り返ってみても、友達は沢山いるが「しんゆう」と呼べる友達は恐らく数人である。

こうして考えてみると「しんゆう」は「親友」と書くより「心友」または「真友」の方が適切ではないかと思う。そして「親友」と書く方は、もう少しハードルを低くして、「友達」よりは距離が近く、「心友」や「真友」よりは距離が遠い、そんな関係性ではないだろうか？

子どもたちにとって「しんゆう」が出来るかどうかは大問題で、「しんゆう」を作ろうと躍起になっている。特に最近の子はそういう傾向が強く、1人でいられないこともあって、ずっとベッタリ一緒に居られる子を求めている。一緒に居てくれて、自分を気遣ってくれる人が「しんゆう」なのだろう。

しかし、一緒にベッタリいようとすれば、そこには結局「我慢」が必要となり、どちらか一方がずっと我慢する形で安定を保つことになる。

子どもたちには一人でいられる強さも持って欲しいし、離れていても信じられる関係性を「友達」の中でも「仲の良い友達」から作り上げて行ってほしいと思う。それには自分自身を余り隠さずに出せる勇気も必要であるし、傷つくことを怖がらない強さも必要となる。

満たされ、大事にされて育ってきた子どもたちにとっては、とても難しいことだろうが、本当に「心友」や「真友」を作りたいのであれば、どうしても乗り越えなければならぬ壁であろう。

子どもたちと関わる中で、「しんゆう」作りに悩んでいる子どもたちに、「親友」と「心友」または「真友」を分けて伝えることが必要だと改めて思う。